わが家の豚児たち

＝三男一女飼育手帖＝

伊藤健吉著

ガッケン・ブック

が家の豚児たち

——三男一女飼育手帖

伊藤健吉

ガッケン・ブックス

推薦の言葉

佐藤道太郎
（名古屋大学教授）

人間は、幼児の間に他の動物にそだてられると、形体だけは人間になりえても、その性情はその動物そのままになってしまう。人間の子は「人間」によって教育されるのでなくては、「人間」になることができない、とするならば、人間とは、なんとたよりない生物なのであろうか。かくして、人間形成の作業は、もともと「教」の字源「メメ」が示すように、すぐれた意味で人間が「交わりあうこと」を、必須の条件としなくてはならないのである。

わたくしは、伊藤健吉君のこの著を読んで、とくにこの点に関する著者の態度に深い感動をうけた。同君は、教育学を専門とするものですら、たじたじとするような家庭教育の難問題にたいして、夫人とともに、真正面から身をもって立ち向っていく。そこには、読者自身、ハラハラさせられるようなきわどい場面も現われてくる。ところが、それらの諸問題が、紆余曲折をへたのち、それぞれすっきりした結末にたどりつき、全家族のさわやかな笑いのなかに解決がなされていくのであるが、それまでの過程を、明るいユーモラスな物語りとして展開し、そ

れとなしに、淡々とした表現の中で、ふかぶかとした滋味をもり上げていく筆致は、いかにも心憎いものと言わねばならない。

著者は、ここに、子どもの教育の問題をあつかうことによって、人間の地肌をじかに捕らえ、その煩わしい複雑さからの見事な純化を得て、かおり高い文学の境地をつくり出している。

わたくし自身、再読、三読しなくてはならないと思うのである。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

まえがき

わたくしは甚六・狂二・悠三・摩世子の豚父である。

今にして思えば、三男一女をかかえて、戦時戦後の困難な時代をよくぞ乗り越えて来たものだと思う。

近ごろの若い人達が、二人くらいの子どもできれいに切りあげて、休日の度にふたりで子どもを連れて、映画だの温泉だのドライブだのと人生を楽しみ、ステレオや車を持って悠々と暮しているのを見るとかすかな悔に似た想いを抱く。

人生は二度とはなかった。その一度しかない人生を、ついうっかりしていたために四児も生んでしまって、見たいものも見ず行きたい所へも行かず、欲しいものも買えずに、一途に子どもを育てることだけに心を奪われて暮らさなければならない人生とは、いったいどういう事だろうか——

そして、改めて周囲を見廻す。ところが、じぶん達と同じ年頃のご夫婦は、申し合わせたように四人も五人も子どもを持ってあくせくと暮している。なかには六人七人と揃えて、何は

なくとも子どもだけは――などと勇ましい事をいっているものもある。

これは戦前十年間に結婚して、満州事変から太平洋戦争の終りまでを、生めよふやせよの国策どおり、またそうでないにしても産制の技術など国禁のような形で知らされなかった庶民の階層のなかに、人生の盛りを過した年配の人達である。

わたくしも、一九四五年の敗戦までに、長男二男三男と、男性消耗の多い戦時統計の穴を埋めるかのように、男児ばかり三人も生んでしまった。こんどこそ女の子をと念願しつつ、妻は遂に男児を生みつづけたのである。

ところが、戦争が終った途端に、女児が生まれた。喜ぶにしては充分タイミングがはずれていたが、それでも、これで多年希望の愛玩用ができたと思って嬉しかった。

それにしても、子ども達はおやじの悔恨も感慨もよそにすくすくと育った。甚六は血の気が多く世話好きに、狂二はしまり屋で要領よろしく、悠三は凝り性でいっこくに、摩世子は潔癖で几帳面に、と四児は様々な意匠を身につけて育っていった。

このささやかな記録は、二十年間の一庶民の育児の手記であり、同じ想いに過した人達に贈る慰めの言葉であり、今育てつつある人々へのことづてである。

一九六四年新春

伊藤健吉

もくじ

推薦の言葉……三
まえがき……五
受胎告知……一一
すべり台のボス……二七
下駄屋の金さん……一八
ちこんき……三三
母系型……二四
紺の大風呂敷……三七

パパの故郷……四二
敗戦っ子……四八
ひとりずまい……五三
背番号ε……六〇
赤いきれ……六四
つるし柿の毒……六七
裸婦とひまわり……七一
裸婦と子ども達……七六
お化けと寝小便……八一
悠三の先生……八八
悠三の放送局……九四
故郷の夢……一〇一
砂糖水……一〇五
おばあさん山からくる……一一三
憎い子　可愛いい子……一一八
ぼろぎれ……一二三
高貴薬……一三〇
昔の家と今の家……一三七
ママの話……一四二
H夫人の幼児教育……一五二

ママの勉強……一六七
植樹祭……一七三
親こうこ……一八一
もこちゃん……一八五
家族の言葉……一九一
時計事件……一九六
低空飛行……二〇五
現代中学生気質……二一三
破れカーテン……二一九
流された父親……二二七
二首のうた……二三五
物と心と……二三九
結婚候補者……二四三
小鳥……二四九
パパの友人……二五五
おとこの子(一)……二六二
おとこの子(二)……二六七
危険な年令……二七一
ママの手紙……二九四
頑張れ！　豚児たち……二九九

装幀

谷内六郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

受胎告知

結婚してから三年目にママは懐胎した。

「おくさん、顔がきついで男だな」

と、せんさく好きな近くの老婆にいわれてママは顔を赤らめた。

貧乏と病気で、長い間結婚のできなかったパパは、ママから懐胎宣言を受けたとき、怖いことを聞かされた思いと、責任の重くなった感じとで身がひきしまるような妙な感じであった。姉二人、弟妹二人、農村に住みながら一升米を買わなければならなかった貧しさの中で育ったパパは、母親が懐胎するたびに眉をひそめた長姉と、黙ったままで気難かしく咳ばらいをしていた父親の顔がこわく、恐ろしいものを見るようにこっそりと母親の腹のあたりを眺めた。

子どもが生まれるということは良いことではない——幼ないパパにとっては懐胎は恐怖であ

り生誕は貧困宣言であった。

「おまえはぼろの中で生まれた。いちばんえらい時だった」

いつか母が述懐したことがある。

——この貧乏の中で、また子どもを生んだらどうなるだろう。いっそおろしてしまおうか——と、母はパパが生まれるまぎわまで、幾度ほおずきの根を煎じて飲もうとしたか知れなかった。しかし母が決意しかねているうちに時期は過ぎてしまってパパは生まれた。

他人の体の変兆を、鵜の目鷹の目で見ている部落の女達の眼が母の決意を鈍らせた結果、パパは闇から闇に葬られずにこの世に出て来たのである。もう姑はいなかったが、当時日本の社会では、隣の家にも姑はいた。

姉が生まれて間もなくしゅうとが亡くなった時、お通夜に来た近くに嫁していた父の姉が、パパの姉の芳子を抱いている母の耳元で、

「今日から芳、芳いっておれるでええことだ。ゆうべ寒かったでおじいさんは凍み死んでしまわした」

と、はき棄てるようにいわれた口惜しさは、その時の夜叉のような義姉の面相とともに、もうとっくに本人は亡くなっているのに、母は忘れることができない。

またある親戚の嫁は、母が自分の長女に芳子の子の字をつけたのは生意気だとふれて歩い

た。明治の末期、草深い木曽境いの山里のこととて、子ども達の名はみんな百姓名まえが多かった。

くら・かぎ・なた・かま・いし・よね・かね・こめ・りん――よいところで、しず・すわ・さだ・はな・ひさ・まつ・ふじ。名まえは農家に密着した生産用具からとり、女の名まえは単なる符丁に過ぎなかった。町方の娘である母のつけた子の字は、貴族や士族の名であって不遜であるという意味であったろう。

母がパパを生んだとき、父は、

「今ごろ、男の子なんか」

といって怒ったという。父にしてみれば無理のないことであり心の底からそう思ったのに相違ない。長男は生まれた時に死んでいたし、すでに上の姉は来年一年生に上ろうとしていたし、父はすでに四十の坂を越していたからである。

いわば、パパは母の胎内にいる時から厄介視され、壮厳な人生の生誕の瞬間においてさえ、いちばん喜ぶべき筈の人にすら歓迎されることなくしてこの世の光を享けた。

母が胎内にパパを抱いて、その処置を思いつづけた三百日。生誕の瞬間に当惑した父のかもし出した心理のかざし、生んだことを後悔しつつ乏しい乳をしぼりしぼり呑ませた母の幾月――それがパパの脳細胞に消し難い傷痕を残さなかったとは考えられない。

パパは、すでに物心ついた時には、夜な夜な悪夢に悩まされて、夢遊病者になっていた。夜中に突然飛び起きて仏壇に向って小便をしたり、枕をかついで外へ走り出たりした。

「それ！　ぼうが寝とぼけた」

と、父母や姉達は面白半分にからかったりしたというが、パパには何の記憶もない。

心理学などに関する何の知識も持たなかった時代のこととて、それが当人にとってどれ程重大な意味を持っていたにしても、寝呆けという言葉から来るおかしさからだけで、簡単に片付けられて、パパの心の中に立ち入って考えてくれるものは誰もなかった。

パパは、自分の心の底に根強く残っている少年時代の傷痕を静かに批判するだけの余裕は持っていたが、自己の分身ともいえる小さい生命が、可憐なママのうちに芽生えていることを知らされたとき、久しく忘れていた恐怖のおののきがよみがえるのを感じて青くなった。

暗い闇の中で、おだやかなママの寝息を感じながら、女っておかしなやつだと思った。

これ程重大なことを、世間話のような調子で打明けて、けろりと忘れたように平安な寝息をたてている。聞かされたおれは興奮と怖れで眠れそうにもないのに――どうせ生まれて来るからには、おれに似てくるな。おれに似たら最後、おまえはやがて夜毎に奇怪な夢を見つづけてうなされるだろう。幼い頭ではどうしょうもない無数の白点が目の前に一ぱいにひろがり、それがやがて次弟に大きくなって、一つ一つがおまえの方へのしかかってくるだろう。あるい

はまた、捕えどころもない虚空の天辺から、無限の奈落の底へ時間もなく落ちて行く夢を見るだろう。おまえはおまえの恐怖の叫びで目を覚ます。目覚めてあたりに誰か救い主がいないかをさがすだろう。だが、お前の横に寝ていたはずのママも、隣にいびきをかいて眠っていたパパもいない。おまえは大きい叫び声をあげて走りはじめる。走るうちにだんだん恐しくなってくる。後から何か追っかけてくるのだ。おまえは夢中になって走る。だが、ちっとも走れはしないのだ。——やがておまえは、凍てついた雪路を踏んで来る夜廻りの声に目を覚すだろう。全身汗一ぱいになって、歯をがたがたいわせ、小さくふとんの隅にちじこもりながら。

おまえは、ママにもパパにも夢の恐ろしさを話さない。話したって、パパにもママにもどうしょうもないことをおまえは知っているからだ。おまえはやがて不眠と被害妄想に悩みはじめる。おまえは偏屈になり過激になり、誰も彼もを敵視するようになり、反抗心をこのうえなく強大に自分のうちに育て上げてしまうだろう。ぎこちなく世を渡り、世をひがみ小心になり、おまえは自分の小心を隠すために、時々だいそれたことをしでかすだろう。おまえは友人にきらわれ、先輩にうとまれ、後輩に警戒されて孤独になる。おまえは孤独から脱れるために、飲んだり歩きまわったり騒いだりする。友人に好かれるためにいらぬ親切をしたりおせっかいをしたりする。そのためにおまえの唯一の特質である純粋さすら、俗性に見られ勝ちになり、つまらぬ奴に騙されたりする。おまえは日夜の苦悩のために、その円やかな相貌すら奇驕な表情

になっていく。――

胎児よ、泣くな。神かけて、おれに似るな。おまえはもしおれの言葉をしりぞけておれに似て生まれたらさいご、おまえの生涯の幸福は絶対に約束されないのだ。神よ――

パパは、はじめてこの世に出てくる子どものことを考えて、かつて祈ったことのない神の名を口にした。

パパは少年時代に、夜になることが怖かった。昼間はどれ程友達と愉快に過していても、夜になって床の中にはいるときまって恐ろしい夢を見た。

眠りを怖れるの余りひどい不眠症になった。昼という現実の世界の他に、夢の中の人生が、いつも暗い口をあけ、一連のつながりを持って一つの現実をつくっていた。

パパの青年期の性格は、夢と現実との闘いによって作られたものだといっても好い。だからパパは、はじめて生まれようとする自分の長子が、もし自分と同じような心情に悩まされることがあったら、子どもなど生まれない方が良いと思った――しかし、しかし妻は素直な性情だ。生まれて来る子がおれに似ないで妻の明るい性格をうけついで生まれて来るなら、ああ、この人生はどれ程楽しいものだろうか……

甚六が生まれた日は、日本国中が紀元二千六百年の祝賀で湧き立っている日であった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com